

お金は「カス」？

野瀬 隆平

新しい一万円札に、渋沢栄一の肖像が使われる。

明治の初期、銀行や製紙会社など多くの企業の創設に係わった人だ。紙幣を飾るのにふさわしい人物と云えるかも知れない。

渋沢は日本における資本主義の生みの親と云われているが、彼自身は「資本主義」とは云わずに、「合本主義」と称していた。お互いにお金を出し合って、効率よく公益の為に仕事をするという考えである。従って、事業を営む者は、「私」よりも「公」を大事にする道德的規範が求められると常々語っていた。

三菱の岩崎弥太郎から、二人が組めば実業界でうまい商売が出来ると申し出があった時も、断固として断ったという。更には、晩年になって息子にこんな言葉を残している。

「お金は仕事をした後のカスだよ」

ここで思い出したのが、次のようなアメリカの話だ。

海辺に邸宅を構える家の主は、二人の子供と暮らしていた。あるとき、子供たちに家事を手伝ってほしいと協力を求め、そのご褒美として、自分の名刺をあげようと云った。例えば、皿を洗ったら名刺5枚、庭仕事をしたら25枚などと。

だが、家は一向にきれいにならない。なぜ協力してくれないのかと尋ねると、子供たちは呆れた顔をしてこう云った。

「何の価値もないパパの名刺をもらうために、なぜ働かなきゃならないの」

そこで、子供たちに、「君たちに協力は求めない。ただ、毎月、パパの名刺30枚を払ってほしい。それが出来なければ、テレビも見せないし、プールも使わせない。ショッピングにも連れて行かない」と宣言した。

ここで、ようやく名刺に価値が生まれ、子供たちは家中をあっという間にきれいにしてしまった。単なる紙切れである名刺を、父親はどうして子供たちから回収したのか。翌月も同じように働いて名刺を稼がざるを得ない様にするためである。

父親は回収した古い名刺を破って捨てた。

「カス」であるという別の側面を併せ持つ紙幣に顔が描かれることを、渋沢翁はどう思うだろうか。

注：名刺の話は、ステファニー・ケルトン著の『財政赤字の神話』による。